

第二百五話 英米 可分、不可分論争(日本の南方作戦構想に影響)

日米英蘭戦を決意するに当たって、余り知られてはいないが、英(蘭)と米が可分か不可分かが議論されたが、残念ながら余り突っ込んで論議されなかったとも思える。アメリカの国内政治に日本はもっと関心を持って良かったのだろう。米国の孤立主義を真剣に考慮していない嫌いがある。本話では、米国の対外戦争不参加気運と日本の南進政策の関係に焦点を当ててみたい。

1 1940(S15)7月27日決定の時局処理要綱に見る南方問題解決上の問題点

本要綱に基づく南方問題の解決は、独の英本土上陸等の好機を補足し、香港、英領マレー等を攻略して、英国勢力を駆逐すると共に蘭印を日本の勢力圏に収めることが狙いであった。これは正しく、米英を分離し、戦争を英国又は英蘭二国のみ限定し得ることを前提としたものであった。要領第3条の四には、『武力行使に当たりては、戦争対手を極力英国のみに局限するに努む。但し、この場合に於いても、対米開戦は之を避け得ることなかるべきを以て、之が準備に遺憾なきを期す。』とある。

米英可分ならば、南方武力行使の前後に、米の対日全面禁輸を受けても、日本は戦争相手を英蘭に限定して南方資源地帯を攻略し自給自足態勢の確立が可能であるが、米英不可分ならば、日本は米英蘭三国と交戦せざるを得なくなり、極めて厳しい状況に陥るのである。英米可分か不可分かは正に国家の命運を左右する重要な判断であった筈だ。

英米可分は陸軍が主張し、海軍は英米不可分論であったようだ。英米不可分論であったならば、海軍は対米戦勝利の見込みがあったのかが問われねばならぬが、今はその話は擱く。

英米可分は可能であったのかどうかを見てみたい。

2 1941年当時の米国の状況

日本が真珠湾攻撃を敢行するまでの米国内の孤立主義の勢力は極めて堅固であった。米国の孤立を支持する者が、80%を超える世論調査は、単なる厭戦気分だけで醸成されたものではなかったとされる。米国民の信念にも等しいものだった。錚々たる人物も米国の孤立主義を訴えていた。一方、F. D. R(フランクリン・ルーズベルト)大統領は、その表面的な言説とは裏腹に、英国チャーチルとの関係もあり、何とかして参戦したいと焦っていた。彼が対日戦を望んでいたかどうかは不明だが、所謂裏口参戦を模索していたとも云われる。

3 対米戦回避の方策はないか?

日本がマレー半島から蘭印を攻略し、比島(当然真珠湾など論外だが・・・)を避けて攻略していたら、米国は参戦の口実を得ることができたのか? F・D・Rは日本の南進牽制の為にハワイ及び比島の戦力増強を図っていたが、牽制にもならなかった。日本は蘭印のみに対して資源獲得を強要するか、或いは英蘭のみを攻撃していたら、戦争は違った局面を迎えたであろうし、自ら先制し得ないル大統領は切歯扼腕したのではないかと思えるのだが・・・。斯様に指摘している米戦略研究所があり、強ち荒唐無稽ではない。何れにしても、米国の孤立主義を十分に認識していなかった、或いは軽んじたというべきか? 知米派の多かった海軍や外務省はどのような認識を持っていたのだろうか?

処理要綱の要領で英蘭限定に努めると謳っているのであれば、それを追求すべきであった筈だ。日本は、日米衝突は不可避であり、米国は何としても参戦すると思込んでいたのか? 10倍の巨人と戦わずして生き延びる方策を追求することにもっと努力して欲しかった。狡猾ナル大統領はあらゆる手を使って日本を挑発しただろうが・・・

*日本の軍事戦略は、残念だが、どうもちぐはぐだ。英米可分を狙うのだったらそれを追求すべきだったのだ。

(第二百五話 了)